

220 — よっかいち うたがわひろしげ
四日市 歌川広重

制作年代：1833年頃

材質、大きさ：錦絵 22 × 34.5cm

所蔵：東京国立博物館



葛飾北斎の富嶽三十六景の新鮮さに打たれた歌川広重は、小形の近江八景図などや四つ切の花鳥画を試作しました。そして天保2年に10枚連作の東都名所を発表して成功すると、同年に於いて天保4年(1833)から『東海道五十三次』の続絵を保永堂から出版し初めました。東都名所では北斎を習っているのに、ここでは北斎とはちがった構図の中に実感的な季節や風物への抒情性が宿されています。北斎の強烈な造形力に代って静かな自然描写によって新しい風景版画が創造されています。これ以後、要求に従って近江八景、京都名所、江戸近郊八景、木曾街道69次を出し、東海道ものも想を改めて40種近く作って、風景画の第一人者になりました。本図は五十三次の内の四日市で、疾風に笠をとられる状景を加味して生活感情を織りこんでいるところに親近感があります。

うたがわひろしげ
歌川広重

広重(1797～1858年)は江戸八代洲河岸の安藤源右衛門の子で、13歳で父の火消同心の職をつぎましたが、15歳で歌川豊広の弟子となり、翌年に広重の名と一遊斎の号をもちました。武者絵や役者絵から美人画に転じましたが、28歳のおり師匠が死んでから風景画や花鳥画に興味を抱き初め、やがて北斎と並び称される風景画家になりました。風景画にみられる広重の抒情的特色は、花鳥画にも共通しています。